

機関番号：84604

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2008～2010

課題番号：20320126

研究課題名(和文) 日本初期貨幣史の再構築

研究課題名(英文) Reconstruction of Early Monetary History of Japan

研究代表者

次山 淳 (TSUGIYAMA JUN)

独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所 都城発掘調査部 考古第三研究室長

研究者番号：80260058

研究成果の概要(和文)：3カ年にわたる研究により、銅銭を基軸に据えた貨幣制度の導入が、中国式都城の建設と一体的に企画され、富本銭が発行された歴史的経緯が明らかになった。和同開珎の発行時には、銭貨の規格性を維持しつつ発行量の増大を図るために、鑄銭体制の整備と鑄銭技術の改良が図られていること、地金貨幣である無文銀銭を駆逐するために和同銀銭が発行されるなど、7世紀末から8世紀初頭にかけての貨幣関係記事が、名目貨幣である国内通貨の定着に向けた一連の貨幣政策として統合的に理解できるようになった。

研究成果の概要(英文)：This 3-years study has found that the introduction of the monetary system that made the copper coin a key currency had been closely connected with the construction of the Chinese-style capital, and historical details from which Fuhon(富本)coin was issued. In addition, the following some points were clarified. When Wado-kaichin (和同開珎) was issued, in order to increase the amount of coin issue while maintaining standard characteristics of coins, the maintenance of system of production and the improvement of the casting technology were attempted. The Silver Wado-kaichin (和同銀銭) had been issued to expel Plain-Silver-Coin (無文銀銭) that was precious metal coins. It brought understanding the article related to money spent documents record related to money from the 7th end of century to beginning of the 8th century as a series of monetary policy for established of the domestic currency. I got possible to understand the documents record from end of 7th century to beginning of the 8th century were a series of monetary policies for the fixation of the local currency that was nominal money.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	3,000,000	900,000	3,900,000
2009年度	3,700,000	1,110,000	4,810,000
2010年度	4,300,000	1,290,000	5,590,000
年度			
年度			
総計	11,000,000	3,300,000	14,300,000

研究分野：考古学

科研費の分科・細目：史学・考古学

キーワード：日本古代史、貨幣史、富本銭、和同開珎、無文銀銭

1. 研究開始当初の背景

1998年、飛鳥の中枢部に営まれた飛鳥池遺跡から富本銭の未製品が大量に出土し、富本銭の鑄造遺跡が明らかになるとともに、7世紀後半に遡る銭貨であることが判明した。これにより『日本書紀』天武十二年（683）の「今より以後、必ず銅銭を用いよ。銀銭を用いることなかれ」という詔に見える銅銭の実体が明らかになり、我が国の初期貨幣研究は新たな研究段階へと突入した。しかしながら、古銭の収集研究をおこなう古泉界では、収集界に伝わる富本銭を室町時代以降に作られた絵銭・厭勝銭の一種とみる説が江戸時代以来通説化しており、富本銭が7世紀後半に遡ることが判明した現在もこれを厭勝銭とみる説が根強い。一方、富本銭は最古の中国式鑄造貨幣として注目を浴びることになったが、銭貨としての基礎的な属性分析や、日本古代史の中での位置付けが不十分なまま、最古の鑄造貨幣という話題性のみが先行しているのが実状である。このため富本銭から和同開珎に至る我が国の貨幣政策の解明と初期貨幣史の再構築が求められている。

2. 研究の目的

本研究は、富本銭の発見を機に、我が国の初期貨幣史がどのように書き換えられるのか、既往の研究と出土銭貨が内包する情報を総括して、新たな初期貨幣史を再構築することを目的としたものである。具体的には富本銭とそれに先行する無文銀銭、後続する和同開珎について、出土銭貨の考古学的情報の分析を基盤に、初期貨幣の流通状態を考古学的に解明し、文献史学や鑄造史学、分析科学、経済史学などとの学際的な研究を通して、名目貨幣が社会に受容されていく過程を、古代国家の成立・発展過程や都城制の整備過程と関連させて考究し、新たな視点からの初期貨幣史の再構築を目指した。

3. 研究の方法

本研究で解決すべき課題として、(1)官人の季禄や交易の対価として支払われた純・綿・糸・布・鉄・鍬などの物品貨幣の価値と使用例の検討。(2)調製の負担量からみた物品の価値の比較検討。(3)大宝元年（701）施行の大宝律令に見える私鑄銭条の復原とその評価。(4)銀・銅・穀のみを大制とした大宝雜令の権衡制度と貨幣制度との関係の究明。(5)集成した無文銀銭、富本銭、和同開珎の出土状況の分析による各銭貨の流通状況の復原。(6)東アジアの銭貨の規範とされる開元通寶の形制や製作技術との比較研究、を掲げた。

これらは考古学や貨幣史のみならず、法制史・経済史・財政史・計量史・技術史・思想史などの研究成果と密接に関連する。このため本研究では、文献史学・考古学・冶金学・材質科学・鑄造技術の研究者を組織した研究集会を開催し、研究発表と共同討議を通して問題の解決を目指した。その研究成果は報告書（研究集会記録集）にまとめて刊行し、研究成果の共有と情報公開を図った。また古代の鑄造技術上の問題の解明を目指して銭貨の復元鑄造実験を行った。

4. 研究成果

2009年度に研究代表者の異動に伴う代表者変更があり、研究計画に若干の変更が生じたが以下の研究成果が得られた。

まず(1)(2)の物品貨幣に関する経済史・法制史的分野の研究では、季禄の物品と位階による俸給差、調制にみる物品の価値などを整理し、奈良時代の物価との比較検討を通して、貨幣発行後も米、布帛、鍬などが基幹の物品貨幣として貨幣的価値を持ち続け、中世に至ることを確認した。検討の過程で、雇役制、力役制度と銭貨の関係が新たな課題として浮上した。

(3)の大宝律私鑄銭条の復原作業では、従来の学説と研究の整理、唐律との比較検討を通して、唐律の量刑の改変が貨幣鑄造における技術労働力を補うために、私鑄銭行為者を鑄銭司で使役させることを目的とした罰則規定であると推定した。また私鑄銭と官鑄銭の識別を目指して、踏み返しによる銭貨の鑄縮み率を明らかにする鑄造実験を行い、私鑄銭認定に向けたデータを整備した。

(4)の大宝雜令の権衡制度と貨幣制度との関係の検討では、富本銭を同時代の開元通寶の重量に合致させて発行したが、初期の古和同銭発行時に極端に重量化が進み、奈良時代の新和同になると軽量化が顕著に進行する過程を明らかにした。これは地金貨幣を駆逐するための銀銭対策の一環と見られ、銭貨が地金価値を離れて次第に名目貨幣化する傾向を把握することができた。

(5)の古代銭貨の出土分布の分析では、無文銀銭、富本銭、和同開珎が順次出土分布域を拡大する事実を確認するとともに、特に和同開珎を出土した775遺跡（6358点）の分布が主に古代の官道沿いに集中する傾向を見出した。また都城や初期荘園遺跡の注目される出土事例を分析した結果、銭貨が律令祭祀の祭具として用いられた可能性が高まり、律

令祭祀の浸透に伴って錢貨の祭祀的使用法が各地に普及したものと推測できた。

(6)の我が国の古代錢貨と開元通寶の形制や製作技術との比較研究では、和同開珎の「珎」「同」を「寶」「銅」の省画とする説の根拠となった銀の湯流れ状態を確認する銀錢鑄造実験を行った。その結果、銀の湯流れの不具合が省画をもたせたとする省画説が成立しがたいことを確認した。これにより「和同」「開珎」がそれぞれに熟語として意味をもち、読みが「ワカイヤ」であるとする研究成果が補強された。

また平城京出土錢貨の再調査を行った結果、錢貨の鑄縮み率から種錢鑄造用の鑄型である可能性が高まり、平城京で生産した種錢を各地の鑄錢機関に供給するといった錢貨生産体制の一斑が明らかになった。これは錢貨の規格性を維持しつつ錢貨の大量生産化を図るための措置とみられ、全国流通を目指した和同開珎の発行時に各地の国衙工房に種錢を供給したことに始まる生産方式と推測される。

日・唐間の貨幣関係法制史料の収集と比較検討では、唐中期の大錢に関する文献史料を収集し、大錢の形制を調査した結果、これまで性格や出自の不明であった西大寺出土賈行銀錢が、唐の大錢を模倣して我が国で考案した当五百錢の試鑄貨である蓋然性が高まった。

漢魏洛陽城の出土錢貨の調査では、整地層や遺構から出土した錢貨が年代決定の有力な情報となることを確認した。

さらに、古泉学による和同開珎の型式分類を整理し、出土錢貨研究への応用法を検討した。飛鳥池遺跡と藤原宮大極殿院出土富本錢の比較研究では、従来の七曜文の解釈に加えて、中央の太極から上下の両儀、両儀から四象が生じる両儀四象生成の文様であることを明らかにした。弥生・古墳時代の我が国出土中国錢貨の集成作業では、55遺跡から約250枚の出土例を確認した。出土状態の分析を通して、青銅器原料として我が国にもたらされた中国錢貨の一部が祭祀に使用された事例を確認でき、錢貨の祭祀的使用法の淵源を探ることができた。

研究集会の開催と報告書の刊行

平成21年3月7・8日の両日にわたって研究集会「出土錢貨研究の課題と展望」を開催し、出土錢貨研究をめぐる論点整理と、豊前・播磨の産銅と鑄銅遺跡に関する分析、検討を行った。その成果を研究報告書『出土錢貨研究の課題と展望』に編集し、平成21年12月に刊行した。報告書の掲載論文は以下の通りである。宮崎貴夫「老岐・原の辻遺跡と出土錢貨」、森岡秀人「弥生時代・古墳時代

前期の中国錢貨をめぐる大陸交渉」、北野隆亮「和歌山県太田・黒田遺跡の井戸と古代錢貨」、芝田悟「北陸地域の初期荘園遺跡と出土錢貨」、松村恵司「律令祭祀と錢貨」、松崎俊郎「長岡京の出土錢貨」、神崎勝「播磨の産銅と鑄銅遺跡」、梅崎恵司「豊前の産銅と鑄銅遺跡」、高橋照彦「平安時代の錢貨生産—錢貨の粗悪化をめぐる—」。

また平成19年度開催の研究集会報告書『和同開珎をめぐる諸問題(三)』を平成21年3月に刊行するとともに、研究成果の一部を『出土錢貨 日本美術 第512号』で公表した。『和同開珎をめぐる諸問題(三)』の掲載論文は以下の通りである。小畑弘己「出土錢貨研究法の問題点と廃棄・遺棄錢による流通錢復元—九州・沖縄を中心として—」、松村恵司「藤原宮大極殿院南門出土の地鎮具」、小林義孝「墓に埋められた古代錢貨」、江草宣友「『日本靈異記』からみる古代日本の錢貨認識」、関口かをり「日本銀行貨幣博物館所蔵の和同開珎関連資料—旧錢幣館収集資料—」、古田修久「古泉学による和同開珎の分類研究」、小泉武寛・松村恵司「和同開珎の鑄造実験」。

平成22年2月6日には研究集会「和同開珎銀錢の鑄造実験」を開催し、和同銀錢の私鑄錢を認定するための鑄縮み実験と、銀の湯流れ具合を確認するための銀錢の鑄造実験を行い、実験結果について研究者間で議論を交わした。平成23年2月に刊行した研究集会報告書『古代錢貨の復元鑄造実験』の収録論文は、松村恵司・小泉武寛による「和同開珎銀錢の復元鑄造実験」「和同開珎銅錢の復元鑄造実験」「銅錢の鑄縮みに関する鑄造実験」「和同開珎旋辺の復元実験」の4編で、実験過程を視覚的に理解できる写真集として編集刊行した。

平成22年10月30日・31日には研究集会「古代長門の産銅と錢貨生産」を山口県長登銅山文化交流館で開催し、長登銅山の遺跡や出土遺物、銅製錬技術を検討するとともに、長門鑄錢司跡の発掘調査成果、山城国府跡出土銅塊の科学分析に関する研究報告をめぐる研究者間で議論を交わした。

以上、我が国の初期貨幣史の再構築を目指した3年間の研究により、鑄造貨幣の発行と流通が、古代律令国家の成立・発展過程や都城制の整備過程と密接に関連することが明らかになった。中でも和同開珎の生産体制に関して、中央で製作した種錢を各地の国衙工房に供給して銅錢の発行量の増大を図った施策が垣間見えてきたのは大きな成果であった。これは錢貨の規格性を維持する上でも不可欠の措置であったと考えられる。

なお研究を通して、和同銀・銅錢の貨幣価値(交換比率)、和同銀錢の生産体制、古和

同から新和同への技術革新の実態解明など、解決すべき新たな課題も数多く浮上し、本研究の最終目的であった初期貨幣史の体系的な叙述までには至らなかった。しかしながら、研究集会を通して初期貨幣をめぐる多角的な研究成果が得られたことの意義は大きく、鑄造実験を通じた技術史的側面からの錢貨研究も新たな方向性を切り拓く貨幣史研究として高く評価されよう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

1. 次山淳、漢魏洛陽城と出土錢貨、奈良文化財研究所紀要 2010、2010年、16-17頁、査読無。
2. 松村恵司、律令祭祀と錢貨、出土錢貨研究の課題と展望、2009年、1159-1174頁、査読無。
3. 松村恵司、藤原宮大極殿院南門出土の地鎮具、和同開珎をめぐる諸問題(三)、2009年、975-980頁、査読無。

[図書] (計4件)

1. 次山淳・松村恵司編、奈良文化財研究所、古代錢貨の復元鑄造実験、2011年、120頁。
2. 次山淳・松村恵司編、奈良文化財研究所、出土錢貨研究の課題と展望、2009年、172頁。
3. 松村恵司・栄原永遠男編、奈良文化財研究所、和同開珎をめぐる諸問題(三)、2009年、114頁。
4. 松村恵司、至文堂、日本の美術 第512号 出土錢貨、2009年、98頁。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

次山 淳 (TSUGIYAMA JUN)

独立行政法人国立文化財機構・奈良文化財研究所・都城発掘調査部・考古第三研究室長

研究者番号：80260058

(H20：研究分担者)

松村 恵司 (MATSUMURA KEIJI)

独立行政法人国立文化財機構・奈良文化財研究所・都城発掘調査部・部長

研究者番号：20113433

(H21→H22：研究協力者)

※研究協力者 (所属機関は協力時のもの)

池田 善文 (美祢市長登銅山文化交流館)

梅崎 恵司 (北九州市芸術文化振興財団)
江草 宣友 (東京文化財研究所)
小畑 弘己 (熊本大学)
神崎 勝 (妙見山麓遺跡調査会)
北野 隆亮 (和歌山市都市整備公社)
木村 理恵 (奈良文化財研究所)
小泉 武寛 (有限会社和銅寛)
小林 義孝 (大阪府文化財センター)
栄原 永遠男 (大阪市立大学)
芝田 悟 (北信越出土錢貨研究会)
関口 かをり (日本銀行金融研究所)
高橋 照彦 (大阪大学)
田中 大介 (大阪市立大学都市文化研究センター)
永井 久美男 (兵庫埋蔵錢調査会)
濱崎 真二 (下関市教育委員会)
降幡 順子 (奈良文化財研究所)
古田 修久 (元・東洋鑄造貨幣研究所)
松崎 俊郎 (向日市埋蔵文化財センター)
松村 恵司 (文化庁)
宮崎 貴夫 (長崎県原の辻遺跡調査事務所)
森岡 秀人 (芦屋市教育委員会)